観音菩薩の宗教 ⑭

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

秘仏となった観音菩薩

前回は、日本における観音信仰の始まりとして法隆寺の救世観音を見た。今回はそこで述べきれなかったことをさらに考えてみたい。

救世観音像は、造像の目的やモデルも不詳であるのみならず、平安時代のある時期から秘仏化され、その姿さえ謎に包まれてきた。秘仏とは仏像・仏画を宮殿（厨子）などにしまったまま扉を閉じて人々に見せぬことをいう。チベットやモンゴルで弘まった後期密教でも、男女の仏菩薩による合体仏（歓喜仏。チベット語でヤブ・ユム）の図像などが公開されることは稀だった。その理由は、煩悩を克服していない凡夫の誤解を避けるためで、一部の高僧が修行のため見ることだけが許されていた。日本における秘仏はこれとは異なり、多くの場合、秘匿された理由が明らかでない。しかも秘仏は、日本で特異な広まりを見せた宗教的習俗といえる。

日本の秘仏には二通りが知られている。一つは何かの縁のある日や期間に「御開帳」と称して扉を開いて姿を見せるタイプであり、もう一つは絶対秘仏といって、封印したまま決して公開しないタイプである。両尊を併せ祀る著名な例として、信州長野の善光寺が挙げられる。善光寺の本尊は「一光三尊」と呼ばれ、阿弥陀如来を中尊に、中尊から見て右に勢至菩薩、左に観音菩薩を配しているとされる。『善光寺縁起』によれば、阿弥陀如来像は欽明天皇の時代に百済から伝わった日本最古の仏像とされるが、白雉五年（六五四）以来秘仏化され、今日に至るまで人の目に触れたという記録はない。すなわち絶対秘仏である。これに対し、善光寺において七年に一度「御開帳」として姿を現すのは、鎌倉時代に本尊の身代わりとして造像された「御前立本尊」（重要文化財）である。御前立本尊も普段は宝庫に安置されて拝することができないという意味では秘仏であるが、御開帳があるということで絶対秘仏ではない。

救世観音は絶対秘仏であった。千年の封印が解かれたのは、いわば「外圧」によるものであった。明治十七年（一八八七）、当時の東京帝国大学招聘教授だったアーネスト・フェノロサは、美術史家の岡倉天心らをともない、美術の調査のため法隆寺を訪れた。フェノロサは法隆寺の僧に救世観音の開扉を迫り、それを実現させた。フェノロサは救世観音を見た時の感動を「世界無二の彫像は忽ち吾人の眼前に現れたり」と、自著『東洋美術史綱（上）』（森東吾訳。東京美術。ルビ金岡）に記している（詳しくは倉西裕子『救世観音像封印の謎』白水社）。これによって、現代のわれわれは世界に誇るべき飛鳥仏を拝する恩恵を得たが、同時にフェノロサの畏れを知らぬ強引さにも驚かされる。思うに筆者であれば、学者の情熱と研究対象への謙虚さのはざまで悩み、恐らくは後者に落ち着くのではないか。殊に千年ものあいだ秘仏であった尊像を調査目的で開封させることは、仮に仏教信者でなくとも畏怖して遠慮するのが普通であろう。

絶対秘仏であった救世観音は千年のあいだ誰もその相貌を知ることがなかったが、その名称についても不明のことが多い。救世観音と呼ばれたのは造立当初からではなく、平安時代以降のことであった（倉西裕子、前掲書）。「救世」の字は『法華経』「普門品」にある「能救世間苦（能く世間の苦を救う）」に見え、そこから採られた可能性が高い。平安期には弥陀信仰とともに観音信仰も盛んになり、こうしたことが救世観音という名の背景とも考えられる。しかしながら造立当初、どのように呼ばれていたかはわかっていない。

薬王院大本堂において
秘仏である薬師如来を守護する
御前立御本尊飯縄大権現御影
（高尾山薬王院蔵、2015年）

次に、秘仏の意味を考える前に仏像製作の目的を考えてみたい。ブッダの入滅後、仏像を含めブッダの姿を図像化することは長いあいだ禁忌であった。そのため仏像が作られる以前は、ブッダの伝記を描いたレリーフにもブッダの姿は登場せず、代わりに法輪やブッダの足跡（仏足石）のみが示された。初めて仏像が登場したのは紀元後一世紀ごろのガンダーラ地方やマトゥラー地方とされる。多くの仏像が作られるようになった大乗仏教の時代の経典には、ブッダ在世中に、ウダヤナ（優陀延）という王がブッダを渇仰、すなわち強く思慕してその像を作ったと記されている（『仏説大乗造像功徳経』）。これが史実かどうかはともかく、ブッダ入滅後の仏教徒にとって、ブッダの姿を偲び、自らの目で見ることは仏像を作る最大の目的であった。ブッダ自身も「法を見るものは我を見る、我を見るものは法を見る」（『相応部』「ヴァッカリ・スッタ」）と説き、仏法を修めることと仏の姿を見ることは同一視されていた。仏像はその手助けとして僧侶の「見仏」や「観仏」の修法に用いられ、信者にとっても眼前の尊崇対象として重要な役割を果たしてきた。

これと反対の選択をしたのが秘仏である。仏菩薩を可視化するのを目的としたのが仏像であるにもかかわらず、秘仏はあえてこれを不可視とした。その理由は仏の神秘化であるとか、寺院の側の布教上の効果であるとか種々に分析されているが、秘仏が日本で特異に展開したことを見れば、神は不可視とした古神道の思想が浮き上がってくる。日本の神々は『古事記』に「隠身也」（身を隠したまひき）と述べられているように、本来、人々にその姿を現わさない。我々に見えるのは神々が身を寄せる「依り代」と呼ばれるこの世の森羅万象のみである。見えざる神を可視化した神像が現れたのは文献学上も美術史上も、知られる限り平安期以降であって、仏像よりはるかに新しい。しかも神像は仏像の影響下に作成されたのであり、神々は見えないことこそが本質であった。仏教伝来当時、宮中の人々が仏像のきらびやかさに驚嘆したのはそのためである（前回拙稿参照）。見えるべき仏像が秘仏化して不可視となったのも、見えざる神にありがたさを感じる日本人の宗教観による点が大きかろう。

救世観音が秘仏化された理由は不明であるが、結果として日本人の心の中で神秘性や宗教性が高まった。救世観音の秘仏化と前後して、平安前期ごろより秘仏は各地に広まっていった。秘仏とされたのは高尾山薬王院の本尊のように薬師如来などの例も少なくないが、各地の調査によれば圧倒的に多いのは十一面観音をはじめとする観音菩薩である（藤澤隆子『日本の秘仏』平凡社）。このことは秘仏でない観音菩薩とともに、観音菩薩があらゆる形態で日本において篤い信仰を集めたことを示している。

院内散歩 ㉔
～薬王院の展示物～

チェンソーアート『亥』
作・城所ケイジ